

漁業の記憶を活かした水門一体型水上市場の提案

Proposal for a Floodgate-Integrated Floating Market Utilizing the Memory of Fisheries

佐藤信治¹, ○川村吉平¹
Shinji Sato¹, *Kippeï Kawamura¹

The Sakai River in Urayasu once formed part of Tokyo Bay's coastline and supported a vibrant fishing port. Fish markets and processing plants lined its banks, and the beacon light (Jōtōmyō) guided boats home. After large-scale land reclamation in the late 20th century, the shoreline advanced, fisheries disappeared, and the river became mainly flood-control and drainage infrastructure. This project reclaims a 100-meter section upstream of the Sakai River East Floodgate to reconnect history with present urban life. Daytime fish and produce markets shift to evening dining and floating food stalls, timed with the floodgate's twice-daily opening. Traditional beka boats bring seafood directly from nearby ports, linking regional fisheries. A new light tower evokes the lost Jōtōmyō, while floating vegetation islands, permeable paving, and stepped decks provide water purification and public access. Movable piers and emergency staging strengthen disaster readiness. The plan transforms a purely functional waterway into a living waterfront where heritage, ecology, and everyday use meet.

1. はじめに

境川はかつて東京湾の海岸線に位置し、浦安の漁業を支える港として発展してきた。江戸期から近代にかけて川沿いには魚市場や加工場が集まり、夜には常灯明が漁船の帰港を知らせ、水辺は人々の暮らしと生業が交わる場であった。しかし20世紀後半に進められた東京湾の大規模な埋立により海岸線は前進し、漁業は消滅した。これにより市場や加工場は姿を消し、常灯明も役割を失って撤去された。港としての役割を終えた境川は防潮と排水を担う治水施設へと転換され、かつての賑わいと地域の象徴は失われている。

現在の境川は都市インフラとして存在するだけで、人々が自然に集まり活動する場としては十分に活用されていない。浦安市も人口構造の変化や公共施設の老朽化が進み、「発展期」から「成熟期」へと移行する段階にある。市が策定した境川かわまちづくり計画では、水辺を再び市民生活に取り込み、環境改善や水質浄化を図りながら、歴史や文化を日常に活かすことが重要な課題とされている。



Figure 1. past and present conditions of the project site

本計画は境川東水門から上流約100メートルの区間を対象に、失われた港町の記憶を現代都市の生活や観光と結び付けることを目的とする。かつて漁業とともに灯った常灯明を現代に読み替え、昼夜で用途が変わる市場や水質浄化の仕組みを組み込み、歴史と現在、市民の日常と来訪者の交流をつなぐ水辺空間をつくり出すことを目指す。

2. 計画背景

2.1 常灯明

境川ではかつて常灯明が漁船の帰港を知らせ、夜間の漁業とまちの暮らしを象徴していた。漁業の消滅とともに常灯明は役割を失い、地域の記憶と目印が失われた。常灯明の不在は、境川の歴史的アイデンティティが現在の都市空間に引き継がれていないことを示している。



Figure 2. Site of the Former Jōtōmyō Beacon

1 : 日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology.

2 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology.

2. 2 境川の歴史と埋立

江戸期以降、境川沿いには魚市場や加工場が集まり、浦安の経済と暮らしを支えた。しかし20世紀後半の東京湾の大規模な埋立によって海岸線は前進し、漁業は消滅した。川は防潮と排水を担う治水施設へ転換し、港としての機能や水辺の賑わいは失われ、市民生活との結びつきは弱まった。

2. 3 求められる水辺再生

現在の境川は治水インフラとしての役割にとどまり、人々が集まる場としては活用されていない。浦安市のかわまちづくり計画が示すように、歴史や文化を再評価しながら市民が日常的に利用できる水辺の再生、水質改善や生態系の回復が強く求められている。

3. 基本計画

3. 1 昼と夜で用途が切り替わる水上市場

昼間は川沿いに市場と飲食店を展開し、新鮮な海産物や地元食材を販売・提供する。夕刻の水門開閉を契機に市場は撤収し、夜は飲食店が中心となる夜間営業へ切り替え、日中と夜間で異なる賑わいを生み出す。

3. 2 周辺施設との連携

市役所職員の昼食利用や郷土資料館来館者の立ち寄り、周辺住民の休憩や買い物など日常的利用を想定する。観光客向けのイベントや季節市とも連携し、平日・休日を問わず持続的な利用を促す。

3. 3 水質浄化

水辺空間の利用と並行して水生植物や浮島型植栽を活用し、水質改善と生態系の回復を図る。市民参加による水質調査や教育プログラムも導入し、長期的に環境価値を高める。

4. 建築計画

4. 1 水門と一体化した配置

境川東水門から上流約100メートルを敷地とし、水門の一日二回の開閉を市場と飲食店の切替えの合図とする。水門下をくぐるアプローチを整備し、川と市街地を直接結ぶ。水門操作に合わせた栈橋や店舗のレイアウトにより、潮位変化と開閉の時間を空間体験として取り込む。

4. 2 水上屋台と季節イベント

水門の開閉リズムを活かし、昼と夜で異なる業態が現れる。昼は鮮魚や地元食材を中心とした市場、夜は飲食や音楽、アートなどを扱う水上屋台へ転換する。着脱式ユニットを採用し、季節ごとのイベントや観光需要に柔軟に対応する。

4. 3 新たな常灯明をイメージしたデザイン

失われた常灯明を現代的に再解釈し、光塔や水辺照明として計画する。夜間は水門の開閉や市場の切替えを示す灯りとして機能し、日中は境川を象徴するランドマークとなる。歴史の記憶を継承しながら、まちの新しい景観資源を生み出す。

4. 4 親水機能

川辺のデッキや階段状護岸を整備し、市民が直接水に触れられる空間を確保する。ベンチや日除けを備え、市場や飲食利用以外にも散策や休憩の場として使える日常的な親水環境を提供する。

4. 5 水質浄化機能

水生植物を植栽した浮島や透水性舗装を活用し、自然浄化による水質改善を図る。べか舟の往来や水門の開閉による水流変化を利用して滞留を防ぎ、生態系の回復と快適な水辺環境を維持する。

4. 6 防災・管理機能

非常時には水門操作と連動して一時避難や物資集積に対応できる構造とする。可動式栈橋や独立電源を備え、市場設備を短時間で撤収可能にすることで安全性を高める。

4. 7 交流・学習機能

市場や水辺空間を活用し、漁業や川の歴史、水環境について学べる展示やワークショップの場を設ける。子ども向けの体験学習や観光客向けのミニ講座、漁師や地域住民による解説イベントなどを定期的に開催する。市民が運営に関わることで、水辺への理解と愛着を深め、長期的な維持管理への参加を促す。

5. 参考文献

- [1] 浦安市都市整備部河川課. 境川かわまちづくり計画. 2021. (境川の現況・課題・水辺再生方針を示した市の公式計画)
- [2] 浦安市郷土博物館. 浦安の漁業史. 浦安市教育委員会, 2002. (浦安の漁業の歴史と常灯明の役割について)
- [3] 千葉県. 東京湾沿岸埋立の経緯と環境影響. 千葉県環境部, 1998. (東京湾埋立の進展と海岸線変化に関する資料)
- [4] 国土交通省水管理・国土保全局. かわまちづくり支援制度ガイドブック. 2020. (全国の河川を活用した都市・地域再生の事例と手法)